# 高温加熱下における 高強度コンクリートの可視化

東京理科大学 兼松 学

- 高強度コンクリート
  - o 一般的なコンクリートと比較して**緻密**。
  - o 建物の高層化に伴い、超高強度化が進み、需要が増加している。
  - 一方で火災時に発生する<mark>爆裂</mark>が懸念される。

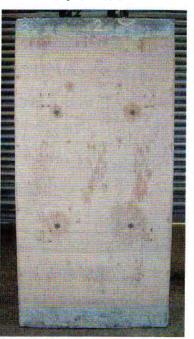
#### • 爆裂とは?

- 。 火災などの高温加熱に 表層のコンクリートが が飛散・剥離する現象
- 内部の鉄筋の耐火機能を 担保するコンクリートの 脱落により、火災時の 構造耐力低下につながる 可能性もある
- o メカニズム的には不明な 点が多い

#### 爆裂後

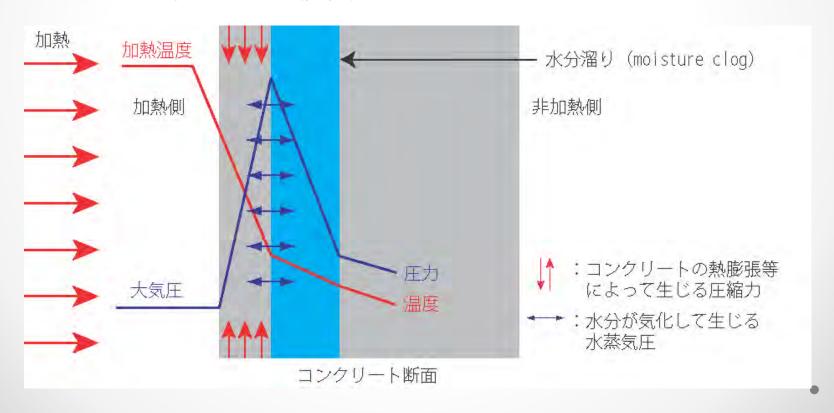


#### 爆裂前



(ref:森田武:コンクリートの爆裂とその防止対策)

- 爆裂のメカニズム
  - 。 熱応力
  - o 水蒸気圧
  - 。 熱応力と水上気圧の複合応力



# 中性子ラジオグラフィを使った実験のメリット・デメリット

#### 利点

- o 非破壊で水分挙動を捉えることが可能である
- 。 温度依存性が少ない
- o 空間分解能が高い

#### 欠点

- 試験体サイズに制約(数cmオーダー)があるメカニズム解明を指向
- 。 安全面の制約

従来手法:センサの埋設が一般的(数cm程度) 欠点:破壊領域での測定が困難 温度依存性の補正が困難(~300℃程度) 空間分解能が低い

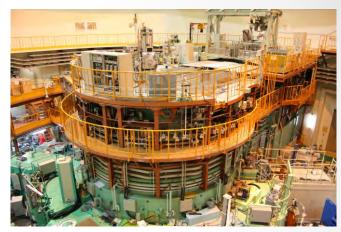
従来手法:バーナーを用いた大規模火災実験 (mオーダー)

#### • 技術課題

- o 数cmオーダーでの爆裂を再現
- 断熱(熱)・拘束(応力)・気密(圧力)の再現
- 。 安全面の確保

#### これまでのチャレンジ

- ① 高温加熱下での水分挙動(2009-2010)
  - o ヒートエレメントを用いた、加熱実験
  - o 日本原子力研究開発機構JRR-3にて測定
  - ○爆裂の発生なし
  - 高強度コンクリート(W/C 50%, 25%)



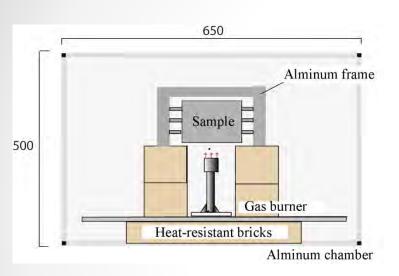
JRR-3: JAEA

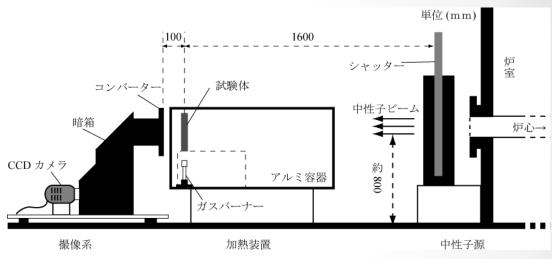
- ② 爆裂発生時の水分挙動(2011-2013)
  - ガスバーナーを用いた、加熱実験
  - o 京都大学原子炉実験所KURにて測定
  - 。 爆裂の発生あり
  - 超高強度コンクリート(W/B 25%,18%)
  - 混和材、ポリプロピレンの利用
  - → より多くの実験データの蓄積 試験方法の検討段階

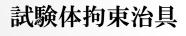


KUR: KURRI

### ラジオグラフィ測定方法概要

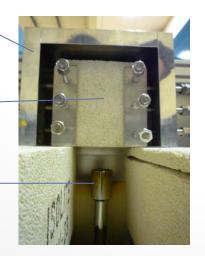


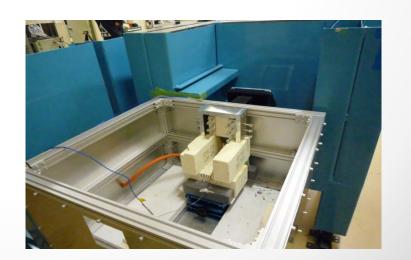


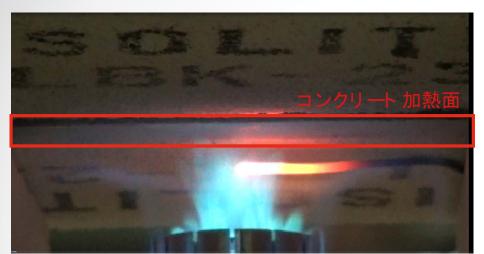


耐熱レンガ 試験体

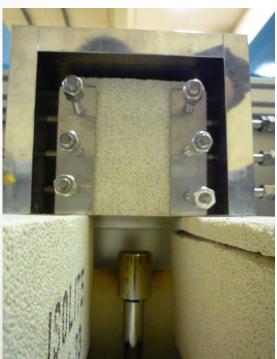
ガスバーナ







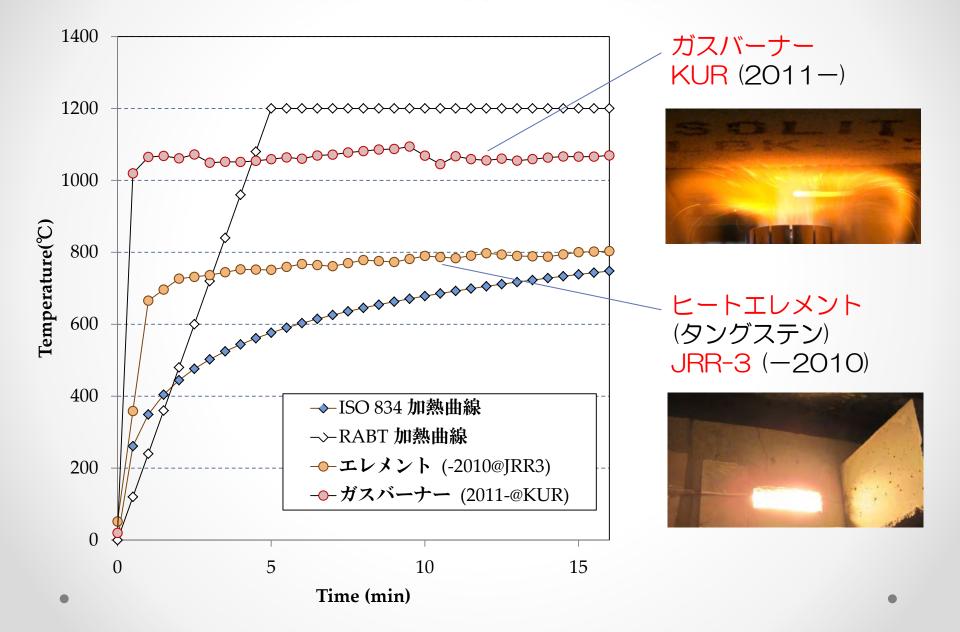








#### 加熱曲線の改善



### コンクリートの調合の変更

2010年度(@JRR-3/JCI 2011年データ)調合データ

MIC	単位量(kg/m^3)							繊維	空気量
W/C	W/B C SF FA						G	PP	(%)
25%	-	165	660	-	-	818	821	-	1
50%	-	165	330	-	-	903	935	-	4

細骨材(大井川水系陸砂)・粗骨材:硬質砂岩

w/c 50の試験体はモデル骨材を使用

2011年度(@KUR/JCI2012年/KURRI Progress Report)調合データ

TAT/C	1A7/D	単位量(kg/m^3)							空気量
W/C	W/B	W	С	SF	FA	S	G	PP	(%)
200/	100/	160	800	88.89	_	425	1060.2		2
20%	18%	160	800	88.89	-	566.7	916.4	0.1%vol	2

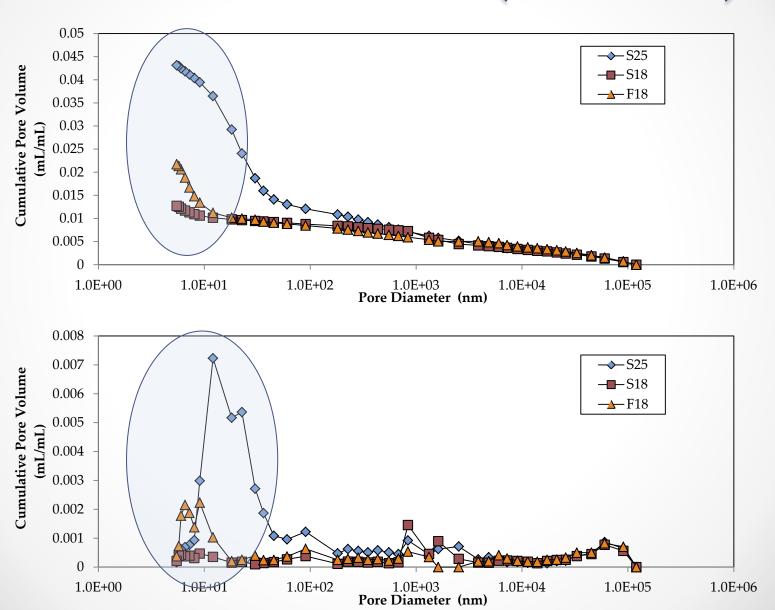
細骨材(硬質砂岩砕砂) · 粗骨材:硬質砂岩

#### 2012年度(@KUR)調合データ

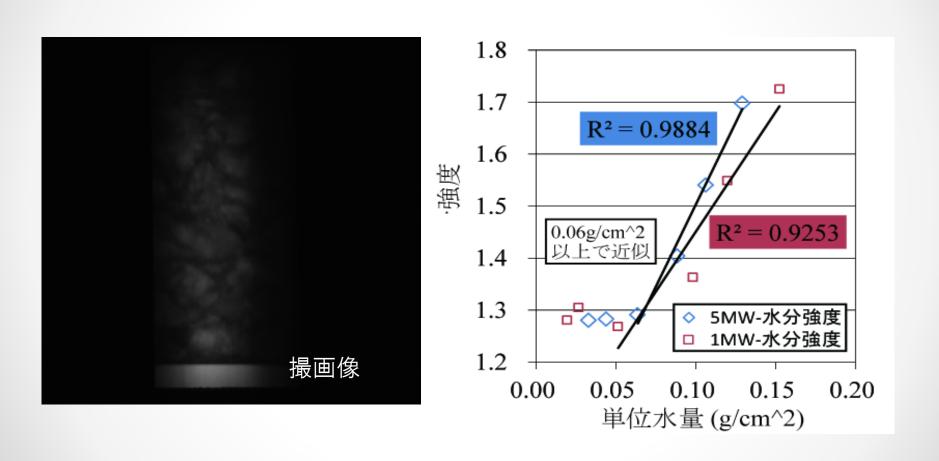
MIC	TAT/D	単位量(kg/m^3)						繊維	空気量
W/C	W/B	W	С	SF	FA	S	G	PP	(%)
		160	800	88.89	-	425	1060.2	-	2
20%	18%	160	800	-	88.89	425	1060.2	-	2
		160	800	88.89	-	566.7	916.4	0.1%vol	2
28%	25%	160	576	64	-	567	916	-	1
		165	576	-	64	567	916	-	1

細骨材(硬質砂岩砕砂) • 粗骨材:硬質砂岩

# コンクリートの調合(2012年度)



# 定量性の確認



### 加熱試験の結果 2011年度

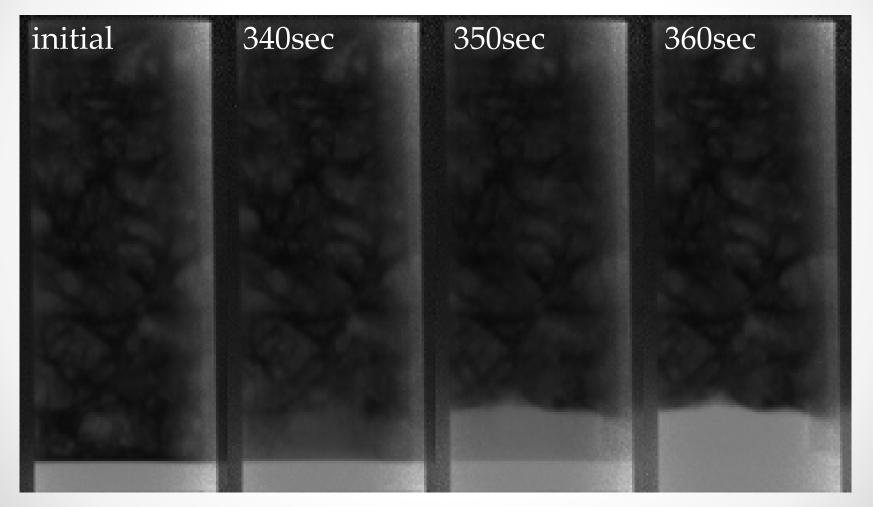
- 水結合材比18%、セメントをシリカヒュームで置換
  - o 有機繊維混入の爆裂防止効果を検証するため、ポリプロピレン繊維を混入した 試験体も準備した。

W/C		单	单位量(k	g/m^3)		繊維	混和剤	減泡剤	空気量
W/C	W	C	SF	S	G	PP	C×(%)	C×(%)	(%)
100/	160	800	88.89	425	1060.2		2.7	0.70	2
18%	160	800	88.89	566.7	916.4	0.1 <b>%</b> vol	3	0.70	2

- 三つの初期含水状態で加熱を行った。
  - 気中-3週間気中に放置し、相対含水率90%程度のもの
  - o 飽水-試験直前まで水に浸しておいてもの
  - o 絶乾-1週間105℃によって乾燥をさせたもの

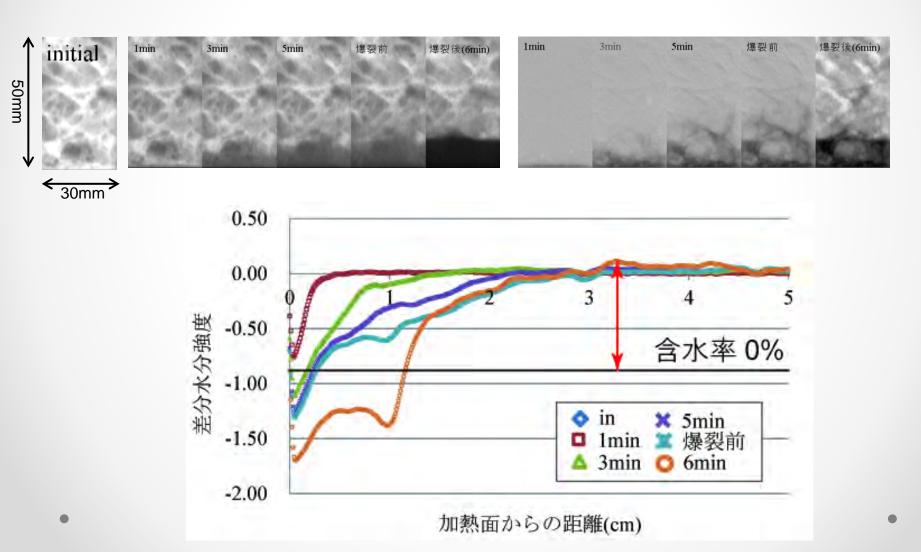
水準	試験体数	爆裂発生
気中	10	9
絶乾	2	0
飽水	2	0
PP繊維混入	1	0

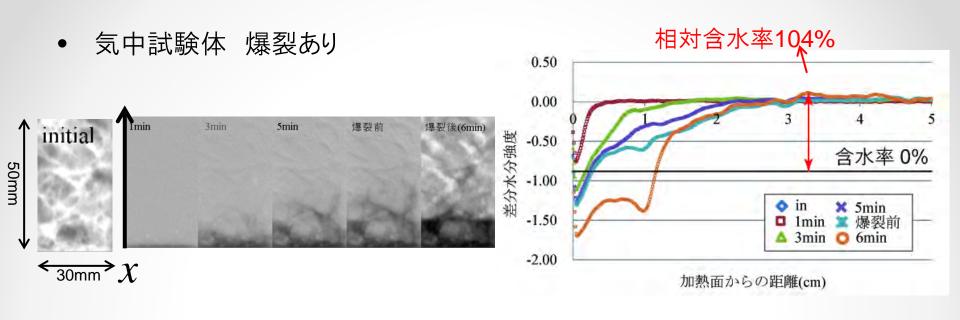
• 実験結果

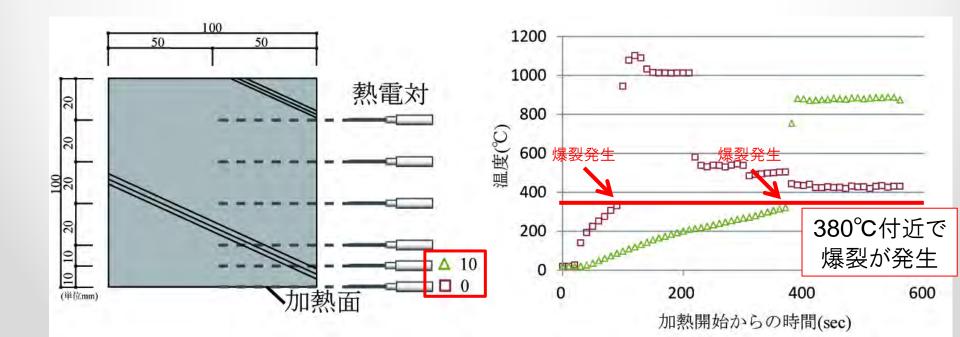


### 爆裂時の水分挙動 -実験結果-

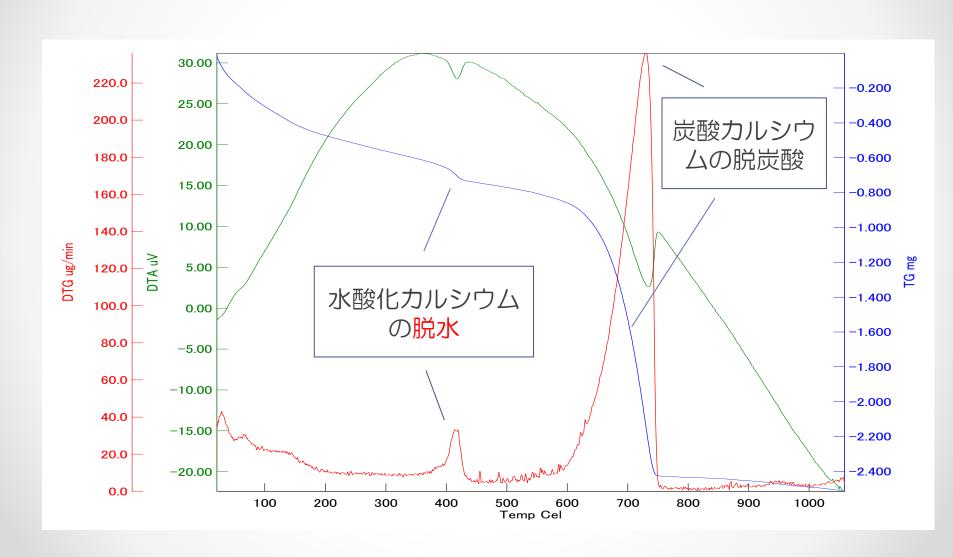
気中乾燥試験体 爆裂あり





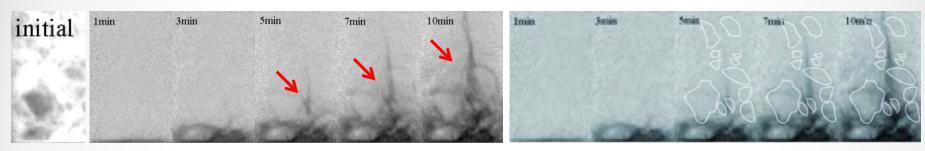


## コンクリートの熱測定(TG/DTA)

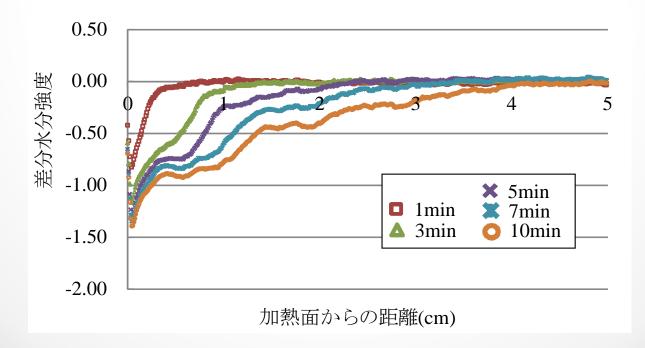


#### 爆裂時の水分挙動 –実験結果-

#### • 飽水試験体



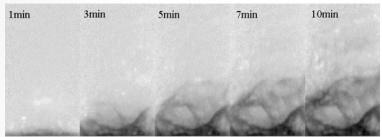
骨材周辺を介して、乾燥が先行する様子が確認できる

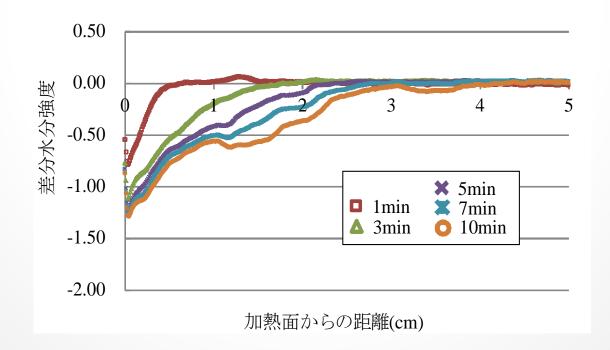


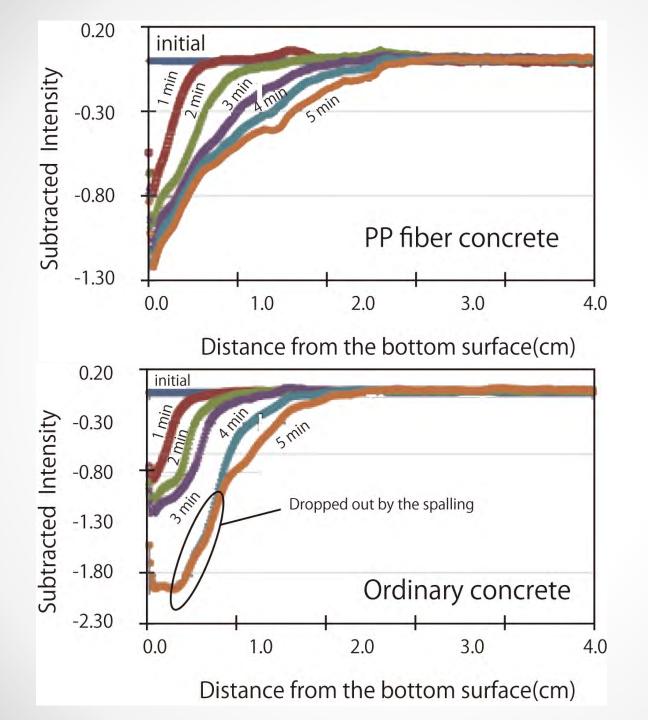
### 爆裂時の水分挙動 -実験結果-

PP繊維混入試験体











### 爆裂研究の今後の展望

- o これまで
  - ☑ ガスバーナーの利用による高温加熱の実現
  - ☑爆裂の捕捉
  - ☑ 水分だまりの確認
- 。 測定に関する課題
  - □圧力・変形・温度
  - □ 拘束度の検討
  - □ 水分の移動方向の制御
  - □ <u>爆裂時の脱落面の形状の測定</u>
- 。 安全性の追求
  - □ 装置精度の改変によるさらなる安全性の確保 (着火方法・フィルター・破片飛散)

ご清聴ありがとう ございました

